

近頃は、よく病院へ通う。総合病院が隣の駅の登戸にある。乗り慣れた小田急線ではあるが、病院へ通う電車では緊張してしまう。オーバーに言えば「もう帰りの電車には乗れないのではないか」といった気持ちになる。待合室には二百人か三百人の人が待っているのではないか。家内が同行してくれる。この時ばかりは家内が頼り甲斐があり頼もしい。待合室で、偶然に昔の知り合いに会ったりする昔といっても、つい七、八年前の知り合いである。行きつけのスナックで知り合い、なんとなく意気投合してカラオケや飲み屋の梯子をした人である。わたしとは同世代である。わたしは松浦で高校生だった頃、この人は京王線の高校生であった。「悪い高校生でした」と言つて喧嘩やナンパの自慢話が得意だった。「ワルで、喧嘩は強かったですよ」が決まり文句であった。男は過去の自慢話をしたが。女は過去の話はしたがない。男の過去の自慢話は相当に割り引いて聞かなければいけない。しかし、この人とはカラオケで唄う歌も知っている歌ばかりで気持ちがいい。同世代のよさである。若い連中とカラオケをやる知らない歌ばかりで閉口する。横文字が入った歌ばかりである。「なんなんだ、その歌は」と文句ばかり付けるので、若い連中もわたしとのカラオケは敬遠したがる。それはそうだが、いつも裕次郎と小林旭では若い連中もたまつたものではない。鶴田浩二を知らない若い人がいたりしてびつくりしたりする。わたしも子どもの頃、東海林太郎を「トウカイリントロウ」と言つて親戚の叔父さんから怒られたことがあった。新しい人を生み、古い人を死なせるのが時代である。待合室で知り合いがいることはわかったが、離れているので知らんぷりを決めていた。しかし、徐々に距離が狭まるのである。挨拶せざるを得ない。パーティーでもそうで、徐々に距離が狭まる。人の流れがそうなのである。「やあ」「どうも」といったおざなりの挨拶をせざるを得なくなる。新宿を歩いていてもそうである。東京で一番会いたくない奴が歌舞伎町の方から女連れで歩いて来る。挨拶せざるを得ない。その日一日が不愉快である。待合室で会つた知り合いは食事に誘つてくれる。そんな好意的な人なのである。病院の食堂である。食欲があるはずもない。しかし、新宿の紀伊国屋ホールまで客を連れて芝居を観に来てくれたり、狛江の稽古場にはパンを山ほど差し入れてくれて、若い連中を飛び上げらるばかりに喜ばせたりしてくれた人である。応じるしかない。病院の待合室での会話にはルールがあるようである。病名を聞かないこと、である。「定期健診ですよ」。会話もそれぐらいの会話である。次の病院通いは半年後である。あの人はいるのか。いないのか。